

馬渡集団カトリックの研究

野村, 暢清

<https://doi.org/10.15017/2543234>

出版情報 : 哲學年報. 24, pp. 51-86, 1962-10-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



馬渡島集団カトリックの研究

野村 暢 清

一 馬渡カトリックの問題的特徴

馬渡島カトリックは日本のキリスト教としては、次の如き特殊な在り方を示している。

第一に、日本のキリスト教の信仰の担い手の分布は個人的である。キリスト者はその存する地縁集団から孤立した存在であり、その宗教的凝集は地縁的でない。これに対し、馬渡の場合は、地縁集団がキリスト教信仰を共有し、*rural church religion* の形をとっている。^{註¹}この部落にはカトリック以外の人間はいない。

第二に、日本のキリスト者は知的傾向が強い。^{註²}その学歴、知識程度、社会階層は高い。その姿はプロテスタントの場合表^{註³}1の如くである。大都市で大学卒が教会員の五〇％に近く、多くの教会で高校卒以上が八〇％を越している。

カトリックの一調査でも、男子大学卒三七％、高卒三五％、女子大学卒二一％、高卒五三％の如くである。処で、馬渡の場合はこれらと全く異なる。殆んど全員が小学卒である。

表 1 プロテスタント学歴 (%)

	豊岡	名古屋	八幡	京都	東灘	大阪	志布志	益田市	白中 河町	倉敷	若松	近八 江幡	海田市	徳山市	福山市
大学卒業	21.87	21.78	21.29	48.75	54.68	22.32	27.77	17.14	41.66	20	6.52	11.76	13.04	20	10
大学在学中	6.26	4.95	3.87	8.75	23.43	4.46	11.11	11.11	11.11		65.21	23.52	1.088	60	5
高校卒業	62.5	71.28	65.16	35	10.93	50	61.11	40	30.55	50	6.52		42.39		40
高校在学中		1.98	6.45	6.25	10.93	12.5		8.5	5.55	13.33	10.86	5.8	16.30	10	10
中学校卒業			1.93	1.25		7.14		8.33	8.33		10.86	58.8	27.17		25
小学校卒業	7.5					3.57		34.28	2.77	16.66	71.73	35.28	56.51	80	10
高卒以上	90.62	98.01	90.32	92.50	89.04	76.77	100	57.14	83.32	70					55

第三に、日本の場合、普通、キリスト教は移入された要素、伝統と異質的なものである。しかし、ここでは、カトリックは伝統的なもの、先祖からの信仰、社会伝来のものとして捉えられ、これに背くことは父母達に、すべての血を分けたもの達に、同じ地に住むもの達に背くことを意味する。

第四に、日本のキリスト教は都市の宗教であり、市民社会の生活形態の上に立った宗教である。これに対し、このキリスト教は農村のキリスト教、農耕生活の上に立ったキリスト教である。この両生活形態の上に生れる、又それに適わしい宗教生活様式は異なる。このキリスト教は、神と土とだけに対して、生きて行きうる生活様式の中でのキリスト教である。

更に、離島という条件による文化的孤立は、先述の諸傾向を一層強めている。集団カトリックの集団性、多数性の

意識は遙かに強められ、伝統的信仰の意識も極端化される。知的水準、知的内容は全体的により低下し、辺地性を帯び、農漁生活以外の諸生活様式に伴う思考様式、行動様式も一応遮断されている。更に、宗教的なものの全文化領域への支配が強められているので、宗教的なもの、カトリック的なものと合致しない文化諸要素は、自ら、押えられ、弱められる形をとっている。

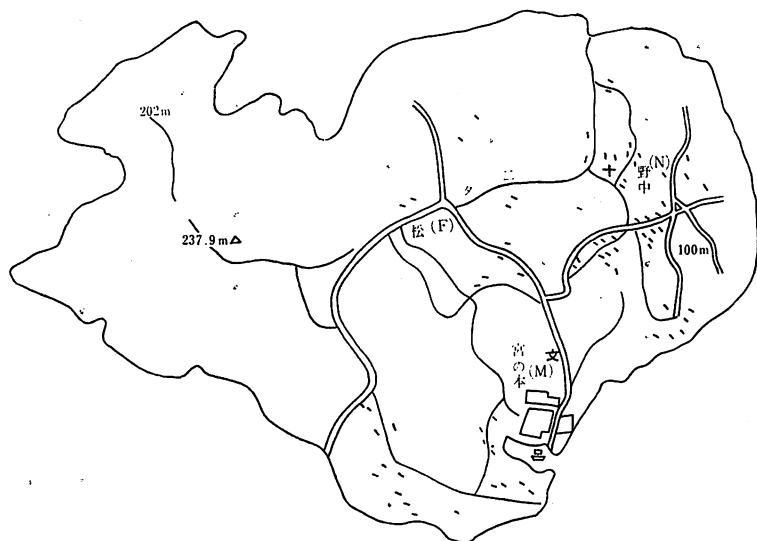
本論文は、以上の如き諸特徴をもつ馬渡カトリックの現象的諸事実を、二つの理論的視点からみた事象に限りつつ、記述分析すると同時に、私の、宗教現象の理論に関する考察をも若干進めてみようとするものである。

二、馬渡島の風土と文化

鎮西町馬渡島は、唐津と壱岐からほぼ等距離の、東西二、八〇〇米、南北二、〇〇〇米の図1の如き孤島である。海から突き出た高山の頂である。島に平坦な部分はない。島と九州本土との交通は一日一往復の郵便船による。舟は朝九時に島を出、名護屋を経て呼子に至る。約一時間を要する。午後四時呼子発、島に帰る。これが唯一の交通路である。島は大きく分けると、M（宮の本）F（二タ松）N（野中）の部落からなる。M部落を本村、他を新村という。本村は家々がくっつき合って建っている全く空地なしの極端な密集部落である。図1の南の四角の部分である。

郵便局、交番、小・中学校、宿屋、商店（三戸）などはここにある。現在舟は本村の港に入る。港から交番、学校前を通り、島の東北部の教会に至る道が島の中央路である。道幅二米足らずの曲りくねった山路である。港から学校まで約二百米程が舗装されている。本村の部分である。このほか、教会から二タ松、冬牧をまわり宮の本にでる道以外

図 1



は一人歩きがやっとの小道である。宮の本、本村だけが非カトリック部落であり、他はカトリック部落である。後者は山畑の間に、家々の点在する分散部落である。

島の戸数及び人口は、文政十一年一六六名、天保十年三二戸一五七名、弘化元年三六戸一八〇名、嘉永元年四一戸二〇四名、安政五年四三戸二三七名、明治元年四六戸二六七名、大正三年一、〇四〇名、昭和十年一八七戸一、一六六名、(M部落七一戸四一四名、F部落六三戸四一一名、N部落五三戸三三五名、新村計一一六戸、七四六名) 昭和五年二五一戸一、三四〇名(本村一〇二戸五一九名、新村一四九戸八二一名)である。明治元年から大正三年、大正三年から昭和三年の人口増加の比較は、前者の増加の異常を示す。この時期の人口の大量移入か、明治元年以前の数字の信頼度の低さか、大正以後の大量の移出かが考えられる。天保弘化嘉永の頃の戸当りの人口は五名以下であるが、安政頃よりの増加の一戸当りの人口は十名を越えている。キリシタン或はカトリック

クのこの頃よりの転入を考えさせる。しかし、この新村の人口、キリシタン或はカトリック達がここに住みついた時期は正確には明かでない。最も旧くは島原の乱の頃との話も存するが、比較的新しい時代に平戸里崎黒島などから来たとするのが最も真実に近いであろう。安政頃の増加、明治期の増加もこれと関係していると考えられる。

家業は殆んどが農或は農漁である。漁業の重要さは本村で最も強く、ニタ松がこれに次ぐ。本村には専漁の家々も相当数ある。したがって本村の場合は所有農地だけからその豊裕度は出て来ない。そのことを考慮しつつ、次に、部落別所有農地の平均比較をなしておく。M部落の農地所有戸数六七戸（全戸数一〇二戸）、その平均（六七戸の平均）は四・六四三反、F部落農地所有戸数五五戸平均四・九三七反、N部落農地所有戸数五七戸平均四・八八九反（FN農地所有戸数一二二戸、新村全戸数一四九戸）である。農地所有戸の中所有農地三反以下のものは、M三五・八%、N三六・八%、F二四%である。所有農地及び甘藷、麦、米の収穫量は表2の如くである。

表 2

単位 (反)	ニ タ 松		宮 の 本		野 中	
	農用地総面積	収穫地総面積	農用地総面積	収穫地総面積	農用地総面積	収穫地総面積
9 ~	9.25	27.27	8.9	5.9	10.5	15.7
7 ~ 8.999	11.11	36.36	16.4	13.4	8.7	21
5 ~ 6.999	14.81	21.81	19.4	31.3	14.0	19.2
3 ~ 4.999	40.74	30.9	19.4	22.3	29.8	24.5
0 ~ 2.999	24.07	16.3	35.8	26.8	36.8	19.2
N	54	55	67	67	57	57

甘 藷 収 穫 量 (部落別比較)

単 位 (kg)	ニ タ 松	宮 の 本	野 中
5000～	7.2 %	1.4 %	19.2 %
4000～4999	1.8	0	12.2
3000～3999	5.4	2.9	22.8
2000～2999	14.5	26.8	14.0
1000～1999	30.9	40.2	21.0
0～999	40	28.3	10.5
N	55	67	57

麦 収 穫 量

単 位 (kg)	ニ タ 松	宮 の 本	野 中
2500～	0	0	5.2
2000～2499	0	0	3.5
1500～1999	0	0	1.7
1000～1499	10.9	0.3	7
500～999	43.6	40.3	42.1
0～499	45.4	56.7	40.3
N	55	67	57

米 の 収 穫 所 有 戸 数

単 位 (kg)	宮 の 本	ニ タ 松	野 中
1000～	5戸	1戸	0
500～999	6戸	1戸	1戸
1～499	19戸	3戸	14戸
米収穫戸数/ 農地所有戸数	30/67	5/55	15/57

米の収獲量に本村の人々が米作地を殆んど独占して来た姿がみられる。島の東北端の米作地でも本村の人の所有である。

新村は殆んどが牧山姓であり、富永、山口、大瀬良、宗などの姓が二、三戸ずつある。本村には浦丸、富永、山下、牧野姓があり、奈良崎、丹野姓は士族であった。本村の人々は在来のこの島の住人であり、新村の人々は対比的な意

味で新來の移住者である。物質的豊裕度も相当に異なる。現在も本村の人々は強い優越感を持っている。かつて新村の人々は鹿同様に見做され、村の寄合いなどの場合部屋の外に立たされたといわれる。

なお、現在、島では自家発電を行い、電気は午後六時から十時までつく。水道は本村のみ一日に若干時間出る。車は自転車もない、すべての品物は本村の港から背に担われて、新村に運ばれる。

新村と本村の文化特徴の対比、両地域の人々の人格特性の比較に際し、ここに述べた、経済的優劣、交通の不便、家屋の分布様式の異り、水道その他の不便、農耕生活への依存度の異り、優越感と劣者の感などの諸 factor が、カトリック、非カトリックの factor と共に dynamic な factor として考えられねばならない。

三、新村のカトリックの生活

新村は、教会を中心としたカトリック部落である。そのすべての人々が日曜毎に集う教会は生活と価値の中心である。教会は異国的な美しさをたたえている。外形と共に内部も整っている。この部落のどの家も全く問題にならない美しさとともに、落着きと安息と真剣さを漂わせている。ここの人々の究極の価値と生命の希望の存する処である。人々は教会の為なら、どのような事でもする。

日曜のミサには、一番（午後六時より）二番（午前九時より）を合せると約八百人、新村の総人口に均しい人々が出席する。両方に出席するものもある。日曜の教会出席は一〇〇%である。細い山道を入々は灯をかがげて島の端々から教会に集い来る。この日曜の教会出席と安息は真剣さときびしさの中に行われている。農村の場合の日曜の安息

は都市カトリックの仕事休みの日の安息と異った要素と決意とを含んでいる。毎日と同じ田畑の仕事を、自ら、はつきりと主の日安息日として休むのである。

私はどんなに苦しい仕事でも、誰れにも負けずにやったが、日曜だけは何かあっても休ませてもらった。日曜だけは決して仕事はしません。(S)

魚の群など来てどんなに利益があつても日曜は休みます。

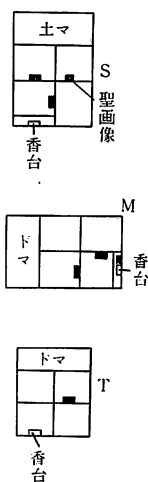
週日のミサ出席者も、毎日五、六十名を算える。平日ミサにいつも出席する人々の分布も島全体にわたる。

家々には家庭祭壇がある。「コウダイ」と呼ばれている。座敷の床間に当る処に、マリヤ像を中心に諸聖画像がならべられており、花があげられている。多くは戸のない押入れの上段のような感じであるが、非常に美しいものもある。又新村の家は貧しくきたないが、この家々のカモイの所に図2の如く数多くの聖人画像がかげられている。

上述の諸事実にもみられるが、ここの生活全体の第一の特徴は

強く信仰的なもので貫かれていることである。ここの一日をSの家庭の場合を例としてみよう。午前六時、一家が香台の前に集い、十五分の朝の祈りをなす。一日が始る。その後大人は仕事に

図 2



就き子供は教会のミサに行く。昼の祈り、毎食前後の祈りがなされる。一同での夕の祈りの後眠りにつく。一日は祈りに始まり祈りに終る。カトリシズムが全生活をぬりつぶしている。生活はカトリックの中に在る。その二女は修道院に入り、三女もこれを待ち希んでいる。

この人々にカトリシズムはそのままに素直に受け入れられ、行われている。宗教的なものは、最も基本的なもの、すべての生活局面の根底として捉えられている。宗教的価値は最高の価値である。迫害に際した場合、死を選んでも守られる信仰である。

このカトリックは地についての信仰です。迫害が来た場合、死を選んでも守り通すことは確言出来ます。

六年生の頃から、キリシタン攻めが来たら死ぬ覚悟は出来ていました。

自分の生命があぶないと医者に言われてもこのカトリックは決して子供を墮しません。

宗教的価値と経済的価値の上下についての間に宗教の上位が即座に答えられる信仰であり、カトリック以外の候補者への投票など考えられない信仰である。

どんなに儲かることがあっても日曜には仕事をしません。ですから宗教が上位です。

心が教会生活に向くときちんとした態度がでるのに、一方学校生活、社会生活にむいたらどうしてこうだらないのか。(教員)

この全体の雰囲気は厳格な宗教教育を新しい世代に與える。子供達は学年別に公教要理の日がきまっており教会に行く。この時間を子供達は休まない。両親達もこれを学校より遙かに大切なものと確信している故、その欠席は学校の場合より強く叱責する。学校と教会行事が重なる場合、学校は、勿論二義的なものとされる。子供達にとり教会に来てならぬと叱られることは最大の罰を意味する。

教会のことと重なりと学校の当番などしない。

修学旅行なども教会行事と重なれば実施困難となる。本年度の旅行でもこれが大問題であった。学校で叱られても大して感じない子が、神父様に話しかかといわれると一瞬にして態度が変わる。

このような馬渡カトリックの生活の基本的特徴以外に、更に、考察すべき多くの局面が存するが、本論文では Ratio-nal theory 凝集理論に関係する二、三の事実の観察と分析にのみ叙述を限ることとする。

四、知とカトリック的行為様式

この信仰は根深く強い。烈しい底力をたたえて人々の全生活を強く支配している。しかし、思想的知的面に余り重点を置いていない。その代表的信者達、死に面して信仰を守り、きびしい行動様式をもつ人々も知的思想的局面への注視は弱い。思想的熟慮や思考に基いて行為が発する傾向は弱い。この人々は、思想面でまとまったものの複雑なものを持つてはいない。読書力も弱く、書物を読むことも殆んどない。カトリック新聞^{註5}、聖母の騎士などカトリック系出版物も今は殆んどが読んでいない。毎日夜明けとともに田畑に出、夕暮とともに帰り、労働に疲れ果てて眠る農村の生活の中で、読書は困難でもある。文字は彼等に臆くうなもの故、教会も掲示板を用いていない、農耕生活の中のキリスト教で知的要素が高く評価され得ないのは当然でもある。

教理のことは、公教要理を学び、初聖体、堅信の為に勉強し、神父様や伝道師に理解させていただく故、父母が教えなくてもよいし、それで充分である。イエス様が何時生れ、何日が何の祝い日か知っているから、司祭か伝道師になるのであれば生活でわからないことはない。

都市カトリックと比較して、この人々は、こうだからこうしなければならないというような進み方をしない。ただこうせねばならないというのである。都市カトリックの場合、何故かを知らないとは動けないが、この場合、このような意識的なものからの出発はうすい。都市の場合、意識面の問題が大部分を占めている。そこには信仰の厚みがない。意識的なものである限り人間的なもので

ある。人間的なものが出発点になる。都市の人は熱心で外面的に非常に活潑に動くが、自己の動機と合わぬことに合うと信仰まで全部崩れたりする。この信仰はそんな表面的なものでない。信仰が厚みと深さを持つている。

強く言うと、都市カトリックの信仰は知的な楽しみに過ぎない。信仰とは言えない。人間的な落付きに資するだけである。教養程度のもの、アクセサリーに過ぎない。知的なものは人間的価値しか持たないので、この人々には不要である。原子理論を知らなくても気にしないのと同じです。

このように、知的要素、被造物である人間の側の思考への注視が弱いだけでなく、それへの反撥さえひそんでいる。

九州のキリシタン系カトリック、祖先伝来の信者達は自らを旧信者と呼ぶ。強い誇りを持っている。現在の日本人神父の70%、日本人司教の全部がその出身である。彼等は自らの信仰を血の中からの信仰とはつきり意識している。これに対して、他地域の信者を新信者と呼ぶ。何代目の信者でも同じである。この新信者は理知からの傾向が強い。これに対し旧信者には人間的な知への反撥は強い。旧信者は理知的なものを軽視しさえする。彼等に迷いはない。

この旧信者全体の傾向はここにも色濃く存している。知的なものが問題にされず、実践的な方向、カトリックの生活様式の局面のみが大きく問題となっている。

しかし、このことは、ここで、カトリック的思考の骨格が捉えられていないことを意味しない。概念化されて論じられないことは存しないことを意味しはしない。知的概念的に精緻な形をなしていなくても、彼等には嚙砕かれたカトリックの心情がある。

その姿を観察する index として、自然の被造物感、終末論的時間把握を用いる。これらは日本在来の事物把握様式には殆んどみられず、しかも、キリスト教的思考の中核的部分をなすものである。

自然の被造物感は、この場合、TATテストへの反応で、神父牧師の反応の如く、直ちに直接的な形では出ては来ないが、質問段階で捉えられ得る形を示している。

自然の写真をみてそのような感じはしないが、自然を天主様が創られたことは信じています。(S,Tその他)

第二の終末論的思考様式もキリスト教的思考の中核でありながら、日本人キリスト者にとり比較的受容困難な局面である。しかし、ここで、この把握様式が生き生きた力を持つて存していることは、次の事件の中にも観察される。

二年程前、世の終りについての話し、やみが来るとの話しが流れ、それが殆んどの人々に受入れられた。ヤミが来た折りには聖別された蠟燭以外使用出来ないとのことであつた。そこで蠟燭を多く買い込んだ人もあり、仕事をして仕方がないという人もあつた。

この場合、勿論誤った形の終末論といわねばならないであろう。しかし、日本の他の地域でこれ程素直に終末論的思考が集団的に受け入れられる処はない。この事件は終末論的思考様式が活力をもつて存在していることを示していると考えられる。

この人々と話していると、私も驚かされるような深いことをずばりということがあります。(神父)

概念化されてはいないが、カトリック的心情の中核的なものは生き生きとした力をもつて、この人々に存しているらしいことが、この二つのindexを通して観察されうる。

処で、今迄述べて来たような知的、概念化的局面の輕視の反面、実践的局面での態度はきびしい、個々の行動場面

での行動様式は、具体的な形ではっきり規定されたものとして捉えられ、その履行に際し迷い、疑い、逡巡はない。このような実践面での規定の確信とその徹底的履行の姿は、日曜礼拝と安息日を守る姿、婚姻及び家族の姿などにもみられる。

日曜礼拝出席率は一〇〇％に近い（スパーによる日本カトリックの調査結果は七六％）。その心組みも都市カトリックと異なる。

都会の人達と私達とは意気込が違う。都会のカトリックは教会に出るとそれでもう役目がすんだような気になっている。

ここでは、あなたは身体が悪いから来るなといはねばらない。（神父）

婚姻は勿論殆んど総てがカトリック間の endogamy であるが、ここでは、子供の数の局面で取扱っている。

先ず、便郵局所有の昭和三十一年の名簿により、部落別子供数を、戸主（父）の明治、大正生れ別^{註6}に比較してみる。

表 3

子供 の数 (人)	戸主父明治生れ					戸主父大正生れ (昭和生れは省く)									
	カリ ニ タ %	トリ ク 松 %	カリ 野 %	トリ 中 %	非 リ 宮 %	カリ ニ タ %	トリ ク 松 %	カリ 野 %	トリ 中 %	非 リ 宮 %	カリ ニ タ %	トリ ク 松 %	カリ 野 %	トリ 中 %	非 リ 宮 %
15															
14	2.3														
13			3.2												
12	2.3		3.2												
11			6.4		2.1										
10	6.9		12.9		2.1										
9	16.2		12.9		8.6			4.3							
8	11.6		12.9		15.2	3.5		8.6			6				
7	16.2					3.5		4.3							
6	16.2		22.5		15.2	14.2	13		9						
5	6.9		9.6		4.3	14.2	21.7		18						
4	2.3		9.6		6.5	35	17.3		21						
3	6.9		3.2		8.6	17.8	17.3		30						
2	6.9		3.2		10.8	7.1	8.6		9						
1	2.3				17.3	3.5	4.3								
0	2.3				8.6				6						
N	43		31		46	28	23		33						
mean	6.63 人		7.39 人		4.5 人	4.25 人	4.69 人		3.87 人						

次に、更に、時期的には少し前である鎮西町役場所所有の最終旧戸籍簿により、戸主の明治、大正生れ別比較をなす。

馬渡カトリックの子供数の極端に多い姿が、平均七・七六人、七・三九人、六・六三人という姿に、九人

以上のもの三七％、三八・六％二七・七％という姿にみられる。ここにカトリックの婚姻に対する考え方の誠実な徹底の履行の姿の一面が観察される。日本の都市カトリックの場合このような姿はみられない。intermarriage^{註7}が半分以上を占めていることは問題外としても、そこでは、行動様式の規定は比較的抽象度高く捉えられ、その市民生活の諸制約は行動の型の厳格な履行を無意識の中に不可能にしている。具体的行動様式はすべての生活局面で、このような厳格さでは履行されていない。

しかし、この子供数に関する結果は性的方向からも解釈されうるので、性的局面にも目を移してみる。このカトリックは性的な問題について非常に厳格であり、きびしい。性に関する罪は特に大きく捉えられている。

新村と本村の人々が一緒に本村の者が性的な悪ふざけなどとしても新村のものは関心をさえ示さない。

辺地で、このように性的な事件の少い処は珍らしい。(K)

表 4

子供 の数 (人)	戸主父 明治生れ		戸主父 大正生れ	
	カリ F+N (実数)	トリ カ M	カリ F+N (実数)	トリ カ M
15	1			
14				
13	2			
12	6			
11	5	1		
10	13	2	2	
9	8	5	1	
8	9	5	2	
7	11	6	3	
6	16	4	2	3
5	5	3	2	2
4	3	3		
3	6	2	4	
2	4	2		1
1	2	4	1	
0	3	8		2
N	94	45	17	8
mean	7.76 人	4.73 人	5.94 人	3.75 人

私は多くの戦いで死者を無数に見て、強く感じたことがある。肉体的、性的なことなどでいたずらした人の死にざまはとても悲惨です。このことは何千もの人を見ていたのではつきり言えます。(S)

このような諸条件を考えると、この子供数の結果は、行動様式の徹底的履行の方向で捉えることが適当と考えられる。

同じ姿は罪の捉え方などでもみられる。キリスト教的思考にとり、罪の観念は中心の問題である。又非常に抽象度の高い捉え方がなされている。カトリックの場合は告解の問題もありプロテスタントより具体的把握様式が強いが、ここでは、都市カトリックよりさらに具体的傾向が強い。罪一般というような考え方は比較的弱く、具体的な個々のケースとして考えられている。

罪の種類も多いので……

以上のような、馬渡カトリックの一特徴、具体的行動場面での規定履行の徹底的厳格さは、大地と神のみを相手とする農耕生活、朝に畑に出夕に帰る生活、部落全員がカトリックである生活の中で許され、又強化される処であり、その思考形式の抽象度の低さもこの具体性と関係している。知的抽象的方向への注視の弱さは農耕生活の中では無理のない処でもある。

この諸特徴は、日本の場合、農村集団カトリック、離島という社会的文化的条件との関連に於いて考えられねばならない。同じキリスト教が市民社会に立つ場合と、農村に、しかも集団的に、立つ場合に生じて来る異りと考えられる局面を多く含んでいる。

次に、宗教的知と一般的学習知の方向性の問題について考えてみる。私の Rational theory に関連する問題であ

る。宗教現象が知的なものと強く関係しているならば、課外に公教要理の時間を持ち、堅信に際して公教要理を覚え込む生徒達は、他の諸条件が不利であるとしても、本村の子供達と同等程度、或は以上であってしかるべきであると考へらる。

そこで、ここでは全く便宜的な一方法として、中学生の学業成績を取り上げてみよう。

学科評点は、科学者でない人が科学的といえぬ方法で取り出した結果である。しかし、一年間にわたる教員の評定は、一学級内の二群の対比に際し、一、二回の精密テスト以上の確度を含んでいるとも考へられる。

なお、中一、中二を取扱ったのは、堅信の時期故、公教要理を非常に勉強し、信仰的に、一つのピークにあると考へたからである。太刀洗今村の集団カトリックも同学年を対比の為に取り上げてみた。表5は学級毎のカトリック非カトリック生徒の学科成績の比較表である。

表6は、学級毎の各学科についてのカトリック非カトリックの平均値につき、いづれがどれだけ多いかを示している。へはカトリックが低いことを、✓はこの逆を示し、下の数字は両者の平均値の差を示す。全学級を通じての学科別の差の総計は学級により評定規準が異なるので余り意味を持たないが、傾向性を示す意味で附記した。なお、Nは平均値を出した各組の生徒数を示している。

表6によるとカトリックは学課成績が非カトリックに比し相当悪い。五段階の現在の評点法でこのような平均値の差の出ることは、比較的大きな差の存在を示す。逆にカトリックが高い場合、統計的に有意の差は殆んどない。数学は全学級を通じカトリックが低い。総計でも数学科の低さが観察される。

表 5

馬渡島集団カトリックの研究

馬 渡 中 学																
				国	社	数	理	音	図	保体	職家	外	職家	N		
A	一年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.71	2	2.28	2.78	2.57	2.64	2.71	2.57	2.5	14
							3.33	3.16	3.33	3.5	3.5	3.83	3.66	2.83	3.33	6
	組 二年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.57	2.5	2.44	2.64	2.5	2.5	2.78	2.71	2.85	14
							3.66	3.5	3.5	3.5	3.5	3.66	3.66	3.83	3.66	6
B	一年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.7	2.2	2.5	2.6	2.7	2.3	2.9	2.4	2.3	10
							3.66	3	3.66	3.33	4	3.66	4	3.66	3.66	4
	組 二年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.7	2.8	2.9	2.5	2.4	2.6	3.0	2.8	2.7	10
							3.66	3.33	3.66	3.66	3.33	3.66	3.66	3.66	4	4
太 刀 洗, 郷 洗 中 学 校																
1	一年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.85	2.42	2.57	2.57	2.71	2.71	3	2.71	2.71	7
							3.04	3.12	3.16	3.12	3.08	3.08	3.33	3.16	3.16	24
	組 二年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	3	2.42	2.57	2.71	3.28	2.71	3	2.57	2.28	7
							3.16	3.35	3.25	3.20	3.20	3.20	3.24	3.20	3.04	24
2	一年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.9	2.6	3.0	2.6	2.8	2.6	3.0	2.7	2.9	10
							2.88	2.81	3.07	2.92	3.11	3.11	3.07	3.14	3.14	27
	組 二年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.7	2.7	2.5	2.7	3.0	2.9	2.9	3.0	2.7	10
							3.07	3	3.14	3.18	3.33	3.07	3.22	3.22	3	27
3	一年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.82	2.66	2.5	2.33	2.5	3	2.82	2.66	2.82	6
							3.04	3.08	3.12	3.00	3.08	3.28	3.20	3.08	2.80	25
	組 二年	カ 平 非	ト リ 均	リ カ 平	ッ ク 均	ッ ク 均	2.5	3	2.66	2.5	2.5	2.82	3.16	2.66	2.82	6
							3.12	3.12	3.04	3.12	3.24	3.20	3.16	3.20	3.20	25

4	一年	カトリック	3	3.4	2.8	2.8	3.2	3	3.2	3	3		5
		カトリック 非カトリック	3.103		3.03	2.93	3	2.96	3.13	2.96	3.06		29
	二年	カトリック	3.6	3.4	2.6	3.2	3	3.2	3.2	2.8	3.6		5
		カトリック 非カトリック	3.03	2.93	3.06	3.13	3.13	3.24	3.10	3	3.13		29
5	一年	カトリック	3	2.75	2.75	3.25	3	3	3.25	3.25	3		4
		カトリック 非カトリック	3.29	3.22	3.25	3.25	3.18	3.25	3.14	3.18	3.18		27
	二年	カトリック	3.25	3.25	3	2.75	2.75	3.5	3	3.25	3.5		4
		カトリック 非カトリック	3.37	3.25	3.03	3.29	3.22	3.37	3.18	3.33	3.14		27

表 6

		馬 渡 中 学										習字	
		国	社	数	理	音	図	保体	職家	外	職家		
A	一 年	0.62	1.16	1.05	0.72	0.93	1.19	0.95	0.26	0.83			K N
	二 年	1.09	1.0	1.06	0.86	1.0	1.16	0.88	1.12		0.81		K N
B	一 年	0.96	0.8	1.16	0.73	1.3	1.36	1.1	1.26	1.36			K N
	二 年	0.96	0.53	0.76	1.16	0.93	1.06	0.66	0.86		1.3		K N
		太 刀 洗 郷 洗 中 学										習字	
		国	社	数	理	音	図	保体	職家	外	職家		
1	一 年	0.19	0.70	0.59	0.55	0.37	0.37	0.33	0.45	0.45			K N
	二 年	0.16	0.83	0.68	0.49	0.08	0.49	0.24	0.63	0.76			K N
2	一 年	0.02	0.21	0.07	0.32	0.41	0.51	0.07	0.44	0.24		0.36	K N
	二 年	0.37	0.3	0.64	0.48	0.33	0.17	0.32	0.22	0.3			K N
3	一 年	0.22	0.42	0.62	0.67	0.58	0.28	0.42	0.02	0.34			K N
	二 年	0.62	0.12	0.38	0.62	0.74	0.38	0	0.54	0.38			K N
4	一 年	0.1	0.4	0.23	0.13	0.2	0.04	0.07	0.04	0.06			K N
	二 年	0.57	0.47	0.46	0.07	0.13	0.04	0.1	0.2	0.47			K N
5	一 年	0.29	0.47	0.50	0	0.18	0.25	0.11	0.07	0.18		0.22	K N
	二 年	0.12	0	0.03	0.54	0.47	0.12	0.18	0.08	0.36			K N
Total		5.53	5.8	8.23	7.20	7.09	7.1	4.87	5.98	4.07			

このような学科評点の低さが何に原因するのかを考えて行く。

カトリック教員Aはいう。

信者の子は何故知能的に劣るのか。小学一、二年生で本村80点、新村50点という姿は何故おこるのか。経済的に新村が非常に貧しいことを考慮しても、母親達も少し心づかいしてくれたらと思う。服のボタンがとれていてもつけてやらない。何故つけてやらぬのか。どうしてこんなにきたなくしておくのか。どうして勉強させようとしなのか。信者のくせにと思う。母の務めがわからぬものにも思う。公教要理を覚えるのに、何故学校の勉強をしないのか。公教要理をやれば学習もよくなるはずというが、結果的には悪くなっているように思う。

新村の貧困は本村に比してきびしい。子供の多さは貧しさをよりはげしくしている。家々はひどい。自宅での勉強の場所もない。このような経済的苦しさはこの姿を来たす一原因である。このほか、本村の村落形態、交通、水道、商店などの生活の便利、その他種々の優位もこの原因である。諸条件は本村の方がよくあるべき姿を示している。しかし、小学二年の頃より課外に公教要理の時間があり、堅信の為め公教要理を全部覚えることなどを考えると、宗教が知と強く関係するなら、又宗教的知と一般学習知とが転移し得るなら、新村の子が先述の如き姿で劣ることは考えられない。哲学年報二三で主張した如き知の方向性の異りが、ここにも、みられるのではないかと考えられるのである。

この問題を中二、中三の生徒の作文「私の希望」及び free Association 結果を通して考えてみる。
作文「私の希望」の中心テーマとして、非カトリックは「学校や島を美しくする為の具体的方法」「学級内の選挙

について」「進学の件」など、自己の外の具体的問題を多く取扱っている。他地域の同年令の生徒の作文にも見られる処である。

これに対して、カトリックの生徒の場合、用語や叙述は充分ではないが、人間としての全般的問題、自己の内側に向けられた問題を、中心テーマとして描いているものが多い。

「私は今考えると、大変心がきたない。もつと心のよい人間になりたいと思う。……何故人間なんて死ななければならぬのかしら？何故年をとるのかしら？私は死ぬことが一番心に現れている。何故人間なんてこんなに弱いのだろう……」。父所有農地一町三段、学課評点4が3、3が5、2が1

「立派な成人になっていくのが一つの楽しみ……年をとって死が近まって一生を終える。私は年をとって死ぬのが大嫌い。死なない薬があれば、いつまでもこの世に生きていきたいのが希望……私のような心のまずい人は、皆から馬鹿にされるような気がする。けれども私は決してつまづかない。心の清い親切な正しいかげ日向のない美しいものになりたい」。父所有農地一段七畝、成績はよくない。

「早く卒業してお姉さまのいらつしやる修道院に入ることを希望しています。修道生活に入る為には、先づよく準備をしなければならぬので、私のような性質から早く抜け出て、キリストの道を完全にわきまえて召出を祈り求めております。……これを読む先生方はなーんだと思うかも知れませんが、私はこう思っています」。父所有農地五段七畝、学科評点4が6、3が3

中二、中三の生徒の作文「私の希望」に、死の問題などの入り来ることは普通の場合にはない。それは充分に理解されていず、又適応されていないが、カトリックが与えているものと考えざるを得ない。自己の外によりも内に、又人間の基本的問題に注意の方向が向けられていることが観察される。内向的傾向、自己対象化性の強化、いのちの

味づけへの真面目な態度などが強く観察される。

このような作文の中心テーマの異りは、カトリックの生徒達の知の方向性の異りを示している。宗教的知は、このような方向に強くむけられている。その姿は free Association でも若干観察されうる。この知の方向は人生の苦悩からの離脱をめぐるものであり、宗教現象の frustration inner adjustment mechanism と強くかわる知であることは、さきの死の現れの多さなどにも観察されうる。そして、このような方向の体系的知の深まりは、学課評定に現れるものとは異った方向のものであり、学課評点には転移しないものようであることが観察されうる。

このような宗教的知の方向性の異りが、他のマイナスの諸条件と共に働き、新村の生徒の学科評点の比較的な意味での（本村との対比に於いての）低さをださしめているとも考えられるのである。

なお、この知の方向性の異なりは、他方向に働かないだけでなく、他方向の知をむしろ弱める傾向を持つと考えられる。これが数学及び理科のカトリックの低さを現わさしめているものかも知れないと考えられるのである。

五、凝集理論の局面からの観察と分析

先ず、二つの調査結果を取上げてみる。

その第一は、馬渡中学二、三年のクラス内でのコミュニケーションの状態に関する一つの簡単な実験的研究である。

具体的方法は次の如くである。生徒各自に四枚の紙片を配布し、先ず全部に名を書かせた。それを裏返して四枚重

表 7

ク ラ ス	カトリックがカトリックと遊ぶとした(%)	カトリックがカトリックと遊ぶとした(%)
3 A 男	75%	25%
2 A 男	91%	9%
2 B 男	91%	9%
ク ラ ス	非カトリックがカトリックと遊ぶとした(%)	非カトリックがカトリックと遊ぶとした(%)
3 A 男	78%	22%
2 A 男	100%	0%
2 B 男	61%	49%

ねる。そこで、一枚目に学級内でいつも遊んでいる人二名の名を書かせ、それをめくる。二枚目に気の合わない人を、三枚目に困った時相談したい人を、四枚目に立派だと思ふ人を、各二名づつ書かせた。これにより学級内でのコミニケーションの簡単な状況調査をなさうとした。調査結果で、同一学級内の男子、女子ははっきり分かれていた^{註10}ので、整理に際しこれを分けて取扱った。ここでは新村本村の生徒を共に相当数含んでいる3 A、2 A、2 Bの男子の場合^{註11}をみる。なお、困った時に相談したい人、立派な人への反応では、非カトリックの社会的優位とカトリックの劣位の

感を取り出されるが、比較的特定個人に集中し、結果がゆがんでいるのでここでは省略する。

四つの中、いつも遊んでいるものへの反応は、特定個人に集中する傾向も少く現実の姿が比較的よく出た問題場面である。そこではカトリックがカトリックと非カトリックが非カトリックと交る姿が、相当はげしく現れている^{註12}。

この結果は学級内の交りに宗教に基く可成りのかたよりの存在を示している。

しかし、この姿は住居の地理的距離の近さからも結果すると考えられるので、一、二の場合についてみておく。

図3は中三ともなると交友関係は家庭の地理的距離により強^{註13}

くは決定されていないことを示している。

以上の如き若干の分析その他にもとづいて、私はこのような結果を来たす重要 factor として宗教現象の凝集機能を考えている。

次に、第二の問題場面として、社会階層と信仰強度をめぐる局面を観察する。

先ず信仰強度の評定から始める。

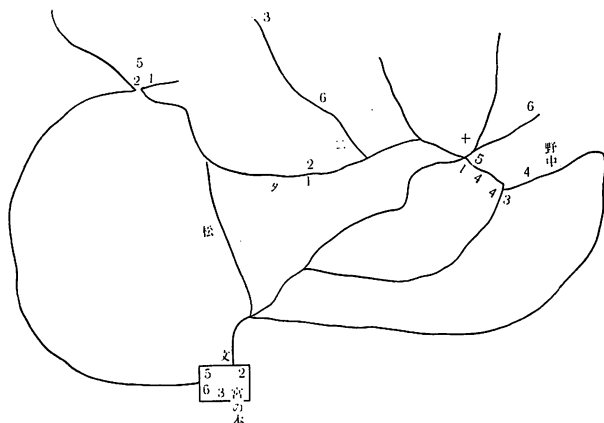
人々が一樣に比較的強い信仰を持ち、日曜礼拝に皆が出席する、このような地域での信仰強度の評定は、比較的むつかしいが、四つの評定により信仰強の人々を、戸主表の中から、取りだしてみた。

評定者Aによる信仰強者群

市	直	山	牧	山	提	山	牧	山	牧	山	高	富	山	北
治	清	山	山	山	山	山	山	山	山	山	野	永	口	島
松	基	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
太郎	太	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
ミ	タ	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
高	高	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
サ	サ	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
ノ	ノ	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
哲	哲	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
治	治	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
助	助	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
平	平	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
藏	藏	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
直	直	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
一	一	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
義	義	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
治	治	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
慶	慶	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山

馬渡島集団カトリックの研究

3 図



1組の3人(いつも遊んでいるもの)を同番号で現す。(中3 a)

評定者Bによるもの。

直市 清治 甚松 タミ 高治 哲治 三郎 兼盛 シズエ 直一 千太郎
 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 提

評定者Cによる。

直一 直藏 小太郎 巖 行松 清治 利助 三郎 福太郎 高治 政雄 民助 兼盛 直市 福太郎 千太郎 正司
 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 古川 提 提

平日礼拝出席の多いもの。

清治 直太郎 利助 タミ 政雄 高治 直藏 小太郎 末次郎 茂 末春 藏松 哲次 民助 福太郎 直市 重吉 山口重太郎 岩藤 富永
 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 山口 富永

以上の評定者は充分評定をなし得る人々であるが、評定の信頼度、意味などを考慮して、次の二群を信仰強群とした。第一群はより多くの人々に指適された。

第一群

直市 清治 哲治 高治 タミ 甚松 民助 千太郎
 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 提

第二群

政雄 利助 直藏 小太郎 福太郎 サノ 兼盛 三郎 治慶 直一 平藏 義治
 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 牧山 北島 富永 高野 山口

次に、信仰弱群として次の如きが評定された。

牧山	リカ
牧山	田手男
牧山	喜代美
牧山	見吉
牧山	弥太郎
牧山	吾三郎
牧山	初太郎
牧山	国松
中の	瀬重雄

この信仰強、弱群の所有農地及び収穫量の姿を昭和三十五年度につき観察する。表8、表9がそれである。新村の場合には漁業が弱いので、この index が新村の人々の経済階層を大体に於て現し得る。

また、この部落の所有農地全般の姿は表2の如くであるので、両者の比較を通して部落全体の中での彼等の経済的位置づけがなされうる。

信仰強第一群は提千太郎を除き、所有農地三段以上である。提氏長男は聖母園主事の収入を持っているので、提氏も中上の部に入る。直市、哲治、高治の農地は島で最高の部である。第二群も北島、サノ、兼盛を除き三段以上である。兼盛は団体役員であり、北島は教員である。従って信仰強群の人々は、同じような生活様式を持つカトリックの中で、経済状態の上中の部に属する人々である。これに対し、信仰弱群は初太郎弥太郎を除いて農用地三段以下である。初太郎の場合も家の内部はひどい。かく見て来ると信仰弱群は経済状態下に多いことがみられる。

この姿は Gorer Wickham などの米英での信仰強度と経済階層に関する諸調査結果と一致している。英国では上層に強く、米国では中層及び上層に強い。キリシタン系カトリックが、米英のキリスト教と類似した姿、伝統的な Church 風の形態をとるに至っていることを示していると考えられる。

表 8 信 仰 強 群

			麦の收穫 量 (kg)	甘藷(kg)	收穫地總 面積(反)	農用地總 面積(反)	米 (kg)
第 一 群	牧 山 直 市	明38	2,500	9,000	16,700	10,600	
	" " 清 治	" 36	400	4,500	7,815	5,705	
	" " 甚 松	" 25	570	300	5,300	3,700	
	堤 千 太 郎	" 19	320	1,800	3,016	1,600	
	牧 山 タ ミ	" 38	730	3,700	5,500	4,800	
	" " 高 治	明	1,300	9,800	17,120	20,505	900
	" " 哲 治	大 4	960	1,200	12,300	19,200	1,380
	" " 民 助	明27	720	1,100	7,615	6,200	360
第 二 群	山 口 義 治	大 4	480	600	5,915	4,700	
	高 野 平 藏	明33	705	1,200	6,300	4,315	
	富 永 直 一	" 45	510	900	4,315	3,500	
	牧 山 サ ノ	" 38	未婚	元修道士			
	" " 三 郎		2,530	9,500	16,615	11,200	
	" " 兼 盛		300	1,800	3,120	2,000	
	北 島 治 慶	大13	教員				
			570	3,500	5,315	3,115	
			885	4,200	8,800	6,300	270
			1,260	1,700	10,700	11,500	660
			780	3,800	7,200	5,700	75

馬渡島集団カトリックの研究

表 9 信 仰 弱 群

			麦 (kg)	甘藷(kg)	收穫地總面積(反)	農用地總面積(反)	米
牧	山	リカ	大 2	320	2,000	3,200	2,200
〃		田平男	昭 3	320	2,400	3,715	2,400
〃		喜代美	大11	248	1,100	2,515	1,700
中の瀬		重雄	明32	290	480	2,100	1,100
牧	山	晃吉	大12	640	825	4,500	2,700
〃		弥太郎	明36	900	2,000	10,200	6,800
〃		吾三郎	〃 40				
〃		初太郎	大 1	343	1,800	6,215	4,820
〃		国松	〃 9				

七六

信仰強群は経済的に上中に位置するのみでなく、社会的評価も高い。それは今年の町会議員候補三人の中、二名が信仰強群に含まれていることなどにもみられる。信仰強群は他の諸条件の類似を考えると、社会階層註14に関しても高いということが出来よう。

次のこの第二の問題場面での結果について考えてみる。先ず問題となるのは、両者が関係変数註15であるかどうかということである。そこで、私の凝集理論についてみてみることにする。

宗教現象の凝集性註16という言葉で、私は、「宗教現象がそれを共にする人々の凝集性註17を強め、その人々を集めつけようとする傾向をもつこと」「宗教現象が、信仰と行事とを同じくする道徳的共同体を構成する方向に働き、それを維持しようとする方向に働くこと」を意味する。ここでは宗教が独立変数と考えられ、凝集性が従属変数と考えられている。

宗教的凝集は政治的凝集、経済的凝集などと異り究極的価値、基本的事物把握様式の同一化、人格構造の類似化を含んだ凝集を結果する。したがって、この theory の系として、「宗教信仰強群が経済的工業的問題場面で保守傾向の強いこと」「mobilization や differentiation の少ない社会で、宗教がより強いこと」などが考えられ、多くの実証的データも存している。

次に、ここでの問題の社会階層と信仰強度につき考えてみる。宗教現象が宗教的な凝集機能、即ち究極的価値、基本的事物把握様式の同一化と人格構造の類似化を含んだ凝集機能を持つなら、宗教集団と社会集団が重なる場合、統計的には、その集団の中心的メンバー、well integrate されているもの程、集団の究極的価値と基本的事物把握様式

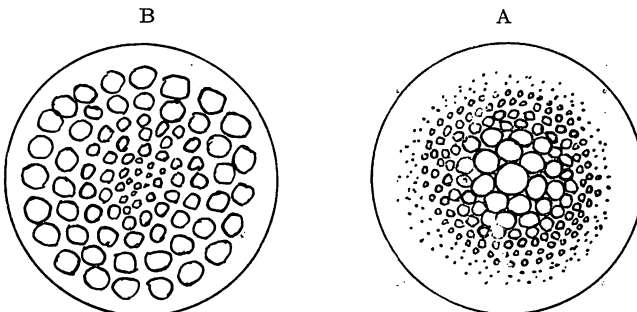
への一致は強いので、信仰もより強いはずであることが考えられる。即ち社会階層、経済階層の高いもの程、その集団の中心にあるもの程、信仰的にも高い傾向があり、逆に、社会階層の低いもの、well integrateされていないもの程統計的には信仰が弱く、且つ、その信仰からはづれて行く可能性を強く持つと考えられる。この凝集理論よりの系を图示すればAの如くであり、私の frustration theory^{註18}よりの系を示せばBの如くである。大きな円の中心部程社会集団の中心を現し、それぞれの小円の大きさは大きなものほど信仰強を示す。

このような考え方で二つの変数の結びつけが考えられる。そして、ここでの研究結果は集団の中心的メンバー程信仰が強いという姿を示していた。このような姿それ自身が凝集理論によって説明され得ると考えられると同時に、この島の状況が、宗教現象の凝集機能が強く働きうる諸条件をもっていることが示されている。

この考え方の場合、独立変数は集団の中で位置であり、従属変数は信仰強度であるともいえる。これに対し、逆の方向の動き、信仰強度が集団の中で位置にむかって働く方向の動きも存在しはする。

その状況を少し観察しておこう。信仰強が経済的状态の上昇、社会階層の上昇を生み、信仰弱が経済的收入の低さや社会階層の低下をもたらすという局面であ

図 4



る。信仰強度が独立変数であり、社会経済階層が従属変数と考えられる場面である。

信仰強群の人々は非常に真面目な実によく働く人々である。清治の場合などその努力と勤勉さとは類を見ない。直市の場合も父が失敗して田畑を失っている。現在の農地は彼の働きである。高治と平蔵も食べ得るだけから現在に至った人々である。又、逆に、信仰弱群の人々は余り働く人々ではない。こうみて来ると、信仰強に基く真面目な生活態度が、今日の高経済状態、高社会階層を生んでいるとある程度までいえることが出来る。宗教に基く勤勉さが独立変数であり、社会階層面の変化、高階層が従属変数と考えられる局面である。

しかし、この考え方で行くと、勤勉なものは社会経済的に高階層にのぼらねばならぬことになる。処で世の中がこのようなうまく行かぬことは人々の充分知る処である。データの一部もこれを示している。そこで、この考え方で社会階層と信仰強度の問題を説明しきることは出来ない。次に、更に、観察を進めて行くと、信仰強群の人々は、清治も直市もその父は区長（カトリック集団の行政長）であつたし、哲治も一町以上は父からの相続である。これらの例にも見られる如く、群全体としては、この人々は父の代より社会的経済的に可成りよかつた人々である。これと逆に、信仰弱群の人々は父の代から比較的悪かつたようである。してみると、先にものべた如く、社会経済状態のよさが信仰強を、その悪さが信仰弱をよんでいる局面もみられうる。

とにかく、経済状態のよさは、この場合その家庭の信仰の強さと大体並存しているので、この家庭の信仰の強さが、学習過程を通して、子供の信仰を強くする。かくて、経済状態のよさと信仰強が並存することになる。これは、現在の戸主の信仰強度と子供の信仰強度の相関度^{註19}の高さからも考えられるところである。

しかし、この行き方は、並存している姿を並存によって説明するもので、並存への過程を説明するものではない。以上観察して来ように、このような、信仰強度と社会階層、経済階層の在り方を示さしめている *Dynamic factor* として、種々のものが考えられうるし、信仰強度が常に従属変数であるわけでも決していないが、しかし、この両者の関連の姿は、宗教現象の凝集機能の局面から、最もよく考えられうる処であり、私はこの *factor* を最も重要な *factor* と考えている。この問題への充分な理論的論及は稿をあらためることとする。

処で、ここで、宗教の凝集機能に関連すると考えられる事例は多い。両部落の強い対立と文化的き裂、決して心から混合しえないこと、本村のものが新村に輕蔑感を持ち、新村のものが本村のものをゼンチョと呼ぶ関係、昭和二十年代に七、八年間カトリックが海の星学園を造り、教育過程を別にしていたことなどもこれと関係する。

次に、更にここでのカトリックの宗教的凝集の若干の局面に言及する。

宗教的凝集が、究極的価値及び基本的事物把握様式の同一化を含み、構成員の人格構造の深部からの類似化を来す凝集であることは、ここでも言うまでもない。この構成員の類似化の姿は、この研究でも充分取り出されているが、今はこれには言及せず、ミサをめぐる問題、*endogamy*、その *individualism* にふれることとする。

日曜のミサの出席者数は八〇〇名、新村の総人口に当る。その出席率は一〇〇%に近い。平日ミサも島の端々から五、六十名が出席する。このミサの集いの定期的繰返しを通して集団の凝集は勿論高められる。しかし、この集りはただ集るのではない。キリシタン以来の危機意識も残存し、場合により命をかけてもとの決意も含みつつ集られる。そしてこのミサは共通の神共通の最高価値に捧げられる。

その主要部は二つの部分に分たれる。前の部分は祈り、聖書朗読などを含む部分であり、第二の部分がキリストが記念として行うよう命じられた部分である。後者がミサの中心部である。パンと葡萄酒を神に捧げる部分である。このパンと葡萄酒はキリスト自らである。これが捧げられることは時空をこえてキリストの十字架を意味する。キリストが神に御自身を捧げられることを、キリストと共に信者一同もその身を捧げることを意味する。ここに、キリストを頭とする神秘体の意識がともどもに強く体認される。このキリストの神秘体の意識はこの人々に非常に強い。

ここのカトリックはキリストの神秘体の意識など、私達も教えられるようなしつかりしたものをもっている。

このようなミサの頻繁な繰返しを通じて、キリストを頭とする神秘体の意識、キリストを頭とする連帯的存在としての意識が、ここの人々の人格構造の深部に根強く構成されて行く。このような神秘体の意識を含む凝集は、利益共同体などの凝集とは全く異った凝集であることは勿論、究極的価値、事物把握様式の同一化、人格構造の類似化を含む凝集をもこえた凝集といえよう。キリストに於いて一つのものの部分の意識である。

なお、このキリストの神秘体はその部分として、なき宗祖父、父母、すべての友を含むものであり、再臨の日にともどもに甦ることをも含んでいる。この神秘体を離れることは、すべてのこの人々と再臨の日に別れることをも意味する。カトリック的信仰の中では、再臨の日の事実是最も高い現実性の水準の事実である。ここでのカトリック的凝集はこのような捉え方をともにすると同時に、この日の救いをもともどもにする凝集である。

更に、ここのカトリックの凝集性は *endogamy* により、特殊な形で強められている。新村と本村の通婚関係は殆んどない。本村の者が養子としてカトリックに育てられ、カトリックである場合にのみ両者の通婚がみられる。婚姻は

秘積であり、聖なるものである。不滅の靈魂を持つ新しい人間の出産という神の神聖な行為への参与を意味する。しかして信者間の婚姻のみが秘積であり、聖なのである。当事者の一方が非カトリックの場合、婚姻は厳密には秘積ではない。このような異教徒との婚姻の式は、かつては教会の外で行われさえした。ここでは異教徒との婚姻は殆んどない。最悪の場合でも少くともカトリックになってから行われる。この例も極端に少い。このような *endogamy* を通しての文化的隔離、文化的境界線は、内部の凝集性を強め、それに特殊の色合を與え、顕著な形で文化的裂け目を生んでいる。

カトリックの凝集はキリスト教的凝集である。そこには強い *individualism* が存している。多くの学者の指適している *universalism* は、この *individualism* を背景としてのみ存し得る。最後の審判に於いて、神に対するものは個であり、告解に於いて精査され宥されるのもも個である。信仰の単位はあくまでも個である。この *individualism* に基いて、強い凝集性に基く人格特性と同時に、*individualism* に基く人格特性がこの構成員に存在する。強い従属性の存在と同時に、強い責任感を持ち、他の人々に動かされない傾向が存在する。従属性と相対した毅然たる自主的態度が存在するのである。どのような環境の中でも信仰を貫く態度、比較的強い自己への反省、生活に対する真面目な自己決定的態度などが含まれているのである。

この姿は新村と本村の中学生の人格特性の対比でもみられうる。表10は学籍簿の評定結果の整理である。評定はABCで記入されているが、これを321に変換し、各組毎のカトリック非カトリックの平均強度を出してみた。これは科学的測定の結果ではないが、諸地域の集団カトリックにつきデータを取りやすいので便宜的に使用する。

そこには自主性、指導性が低いが、正義感、責任感の強い人格特性がみられる。*free Association* 結果でも刺戟語よいことへの反応で「いいつけを守る」「掟を守る」などが強く出ており、他者を極端に気かけると同時に、先

述の作文にも見られる如く、毅然として自らの道を行く姿も観察されるのである。なお、集団の凝集性と従属性とは私の従来のテスト結果で、自主性—従属性 $P=0.17$, $K=0.5$, $S=1.37$ の姿や、構成員に変化が少く行動様式が具体的に規定されている程、凝集度が高いことなどより、従属性は凝集度をたかめる一人格特性であることが主張されう。従属性は凝集性に応じた人格特性と考えられるわけである。なお、社会凝集の諸類型との関連などについては別稿にて論ずることとする。

しかし、馬渡カトリックの場合、この両者を対比的に考えると、凝集性の機能は非常に強く、キリスト教的 individualism は弱い。それは充分に展開してはいない。このことは、他地域出身のカトリックが、この集団の中に、充分に入れないことなどにもみられる処である。

十年近くも、ここにいるカトリック婦人でさえ、教会清掃の役割りを決める時、あれはよその人ということで仲間に入れてもらえない。

二十年も前に結婚の為カトリックになった婦人の場合も同様である。

以上、宗教的凝集への研討を、更に進めて行く為の一步として、馬渡カトリックの宗教的凝集性の二、三の特徴につき、若干の研討を進めてみた。

この研究は、キリスト教が、農耕或は農漁文化の上に立ち、集団的形態を取

馬渡島集団カトリックの研究

表 10 馬 渡 中 学

			自主	正義	責任	根気	健康	礼儀	協調	指導	公共心	N
A組	一年	カトリック	1.85	2 2	2.07	1.64	2	2.21	1.85	1.5	1.93 √ 1.83	14
		非カトリック	2.33	2.16	1.83	2.33	2.33	2.16	2		6	
	二年	カトリック	1.85	2.14 √ 2	2.5	1.35	1.64	2.42	1.85	1.21	2.42 √ 2	14
		非カトリック	2.5	2.66	1.5	2	2.66	2.33	1.66		6	
B組	二年	カトリック	2.07	2.23 √ 2	2.23	1.69	1.92	2.15	1.61	1.46	1.84 √ 2	13
		非カトリック	2.5	2.25	2	2.25	2.25	2.25	2.5	2	4	

り、それが伝統的な factor と考えられ、信者達の殆んどが小学卒である離島の場合の一つの姿を記述し分析した仕事である。更に、このような場面で、観察しやすい二つの理論に関する局面だけを若干取扱ってみた。なお宗教的知の方向性の問題、知と行為規範の受取り方の問題、及び凝集理論に関する考え方を若干進め得たかと考えている。

なお、ここでの研究結果は次の研究での仮説であり、都市化、集団度などの社会的諸条件を異にする長崎、黒崎、平戸・五島諸地域での集団カトリックの研究分析がこれにつづくことを断っておきたい。

註1 このような集団的キリスト教は、日本では、九州地域のキリシタン系カトリックを除いて殆んどみられない。churchaの語は、その地に生れたものはすべてその教会に属するという意味で、sect に対する意味で使用されている。

註2 キリスト教が日本に入る場合、西欧文化とともに入り来ったことが、このキリスト教と知的なものの結びつきを極端に強めているが、他文化の中に、孤立してキリスト者が存する場合、他文化の諸要素に対する為に、知的要素は強くならざるを得ないことも事実である。

註3 現在実施中のプロテスタントに関するテスト結果の一部である。

註4 コングレガチオ、マリアーナの新信者生活についての実態調査

註5 受洗後三年以内の人々の読書に関するマリアーナの調査結果によると、定期出版物購入の姿は、購入している男61%女64%、読んでいるものカトリック新聞男41%女29%、カトリック生活男20%女37%、声男17%女10%、聖母の騎士男9%女13%、キリストに倣いて、聖人伝などを多くのものがよんでいる。

註6 日曜ミサ出席は20才まで男子都市87%、郡部95%、女子都市91%郡部95%、21—40才まで男子都市75%、郡部82%、女子都市78%、郡部80%、41才以上男子都市74%、郡部92%、女子都市77%、郡部77%の姿がスパーの調査により取り出されている。

註7 大体子供が生れ終っている戸主の明治生れと、充分生れきっていない大正生れとを便宜的にわけて集計した。

註 8 一九六一年で、inter-marriage 2191 endogamy 1494¹ 一九六〇年で inter-marriage 2211 endogamy 1457 以上は全国での姿である。処でその中に含まれる長崎では、inter-marriage 11 endogamy 559 である。

註 9 生徒の作文 Data にも明かにみられうる。

註 10 男子が若干の女子を相談したい人、尊敬する人としてあげている場合など、男女の区別は全く考えずにカトリック、非カトリックとして算える。

註 11 3 A、2 Aなどの女子の場合、本村のものは一、二名にすぎず他は新村ばかりであるので、Dataとして使用出来なかった。これも新村の子供の多さを示している。

註 12 いつも遊んでいるものに関して相当はげしいかたよりがみられるが、他の三つで余りみられないのはそこでもみられる程、学校の教室内では強くは出ていないことをも示している。

註 13 他学級の場合も同様の姿はみられる。

註 14 職業学歴住居等の他の要素が大体類似しているので、このようにいいうると思える。

註 15 ここでの二つの変数の関係づけは、先づ frustration theory から出発した。宗教現象が frustration と関係するならば、より frustrate する可能性の強い下層において宗教的なものは統計的には強くあつてしかるべきであるとの系が構成されうる。sect 風の宗教にこの姿はみられるが、この場合下層に強くはない。むしろ逆の姿が出ている。米英の church 風の場合と同じ形である。この場合 frustration adjustment の機能よりも他の機能局面が強く出ていると考えられる。その機能として宗教現象の凝集機能が考えられるのである。

註 16 ここで、私の凝集理論と所謂 integration theory との問題について一言しておく。integration theory は宗教社会学、民族学、民族学の領域で生れて来た theory である。その後の integration は社会を単位とした integration である。社会の存続と維持をめぐるものである。Yinger は宗教の social integration function を社会の存続とその平衡維持の為に必要な機能と

考える。大衆の衝動性や知性の缺如に対して、宗教は社会に必要な要素である。これにより、社会的緊張、社会内の *frustration* が弱められ、敵意や自己中心主義が破壊力とならぬようにされるとする。Brown などとも社会を究極的な機能的単位とみ、文化現象を個人の *need* より社会的 *need* を促進する為の社会的創造物と解する。すべての文化現象を社会的統合を促進する方法と解し、宗教現象もこれに参与すると考える。

処で、私は Yinger のいう如き宗教現象の社会的機能を、Boisen と同じく、宗教の *social frustration adjustment* という考え方で捉えている。そして、私の凝集理論の場合、分析単位は社会から階層にまで、更に、その中の個々人の *attractiveness* の強度にまで与げられている。集団の内部での *status* の在り方、個々人の在り方と信仰強度に関係して問題が取扱われている。

註17

宗教現象が凝集性を強めることに關する。他の研究として、フェステンガーの一九四七年の実験の如きもあげられる。カトリックとユダヤ人を使用しての実験である。実験の前半で、宗教的所屬を知らせないで、論議が行われ、問題への投票が行われる。後半部で、宗教的所屬を知らせて、議論をし投票がなされる。この結果は、宗教集団の所屬はある状況のもとで集団を構成する（カトリックは公の場面でユダヤ人は公でない場面で）重要な *factor* であるとの仮説に支持を与える。ここで宗教は独立変数であり、凝集性は従属変数である。

註18

哲学年報23輯

註19

戸主の信仰強度と作文 *free Association* を通じての中学生の信仰強度との間に見られる。

註20

アメリカでの *endogamy* の姿については哲学年報23で言及した。

註21

T. Parsons などは *universalism* と *activism* をキリスト教の基本的特徴としてあげている。

註22

神道の祭りの場合、信仰の単位は個人ではない。お山かけの場合など、代参の人々は村の人々の代参として神前で決定され、彼等は村の豊作を祈るのであり、村の人々は登拜の間精進を続けるのである。この信仰の単位は集団である。